

業界近代化に向けてJCAの戦い

4代目会長に 29歳の竹谷内一愿氏

Fourth President : Kazuyoshi Takeyachi (Term 1970 - 1989)

団体加盟制から個人加入へ

The First Step For Restructure : From Coalition to Individual Membership



1970年2月21日は総連盟の歴史に残る個人会員制が断行された日である。

総会挨拶で、竹谷内米雄会長は次のよ うに語った。当総連盟としても、15団体 という大世帯にふくれれば事務も煩雑に なり、今までのように幹部の奉仕だけで は動きのとれない段階に来ております。 そして、それに関連してここ2~3年、 総会の度に提案される個人会員制を思い 出します。例えば成長盛りの青年に食欲 を出しちゃいけない、服もつんつるてん で我慢しなさいとはいえません。任期中、 私はこの日本カイロプラクティック総連 盟という、気宇壮大な名称を考えており ました。他人はその名称に圧倒されます。 会員は何人ですか。どんな活動をしてい ますか。しかし事実は会員数もつかめな い。統計も作れない。金がないから公の 運動が何一つできない。有効な治験例も、 根も葉もない幽霊物語と受け取られてし まう。

私は度重なる辛い思いを耐えてきましたが、いまや会員制は考慮の段階でなく、 決意の時期にきたと思います。

任期を迎えた竹谷内米雄会長に代わり 新会長に若干29歳の竹谷内一愿氏が選任 された。新会長は次のような就任挨拶を 行なった。

会長という重職に信任されたことは名 誉というより、重大な責任と考えており ます。今年度より新しい規約をもって総連は個人単位からなる全国的会員団体として発足することになりました。私は先輩の経験と青年の行動力をもって魅力ある会の運営を行なう覚悟であります。

青年三羽烏

竹谷内新会長を支え、青年三羽鳥といわれたのは竹谷内会長の他に、前理事長の子息、荒井延尚氏と松本茂先生のもとで修行した基尚道氏がおり、いずれも30歳前後で明日の業界を背負う青年たちであった。

総連会報発行

従来の団体加盟制時代は、総連独自の会報がなく、意志の疎通に支障があった。 月刊会報の発行によって理事会の討議内 容が直接会員に通知されるようになり、 組織としての体裁が整えられた。

会員制が好評

カイロの全国的統一団体の誕生は長い間の夢であり、これを機会に団体を解散して総連一本に協力を宣言をする会も相次いだ(その逆に、これを機会に総連と縁を切る団体もあったが)。会員制になると、留学相談、総連主催国際講座の優待、研修会の割引、米国視察旅行、総連印刷物の優先入手など会員の恩典が次々と実行に移された。

総連の財政が一躍十倍に

団体加入制の限界は慢性的財政難に表 われていた。個人加入制になると総会で 決めた会費を会員が直接会に支払う。総連が会員制になって百名の会員の段階で財政は団体加盟制の時の十倍になっていた。財政の確保は専属の事務員を雇用し、役員を雑務から開放し、事業の拡大を可能にした。同時に会員管理、会員サービスにも着手する。

研修会の充実

慣例となっている月例研修会は理論と 実技の他に、広く学識経験者を招聘して 業界一般、医療、社会事情吸収の場にす ることになった。また理論と実技は出来 るだけ一致させ、内容を解説する印刷物 も事前に用意するなどの工夫を行なった。 毎回の参加者は50名前後で、初顔や地方 からの参加者も目立ち、次第に研修会が 充実してゆくのが分かる。

米国カイロ視察団来年実現

海外の進んだカイロを直接見ることで 見聞を広め、将来の日本のカイロ業界の あり方を研究する意味から、初の業界視 察団をアメリカの主要カイロ大学、クリ ニックに派遣することを決め募集する。

プロフェッションの実践

カイロ発展のためには技術やテクニックの練磨だけでなく、教育、研究、業界、政治活動など幅広い職業意識の自覚と実践が必要であると竹谷内新会長は考えた。 恩師ジェンシー学長の「カイロプラクティックはプロフェッションとしてのみ発展できる」の実践を意識していたのだ。

定時総会 JCA Convention (35頁に続く)

口	会 期	会長	会 場	備考
9	1970年2月21日	竹谷内一愿	東京・東京都勤労福祉会館	団体加盟制を個人会員制に改革
10	1971年4月11日	竹谷内一愿	東京・平河町、全共連ビル	支部づくりスタート
11	1972年 4 月16日	竹谷内一愿	東京・平河町、全共連ビル	会員170名を越す
12	1973年 4 月15日	竹谷内一愿	東京・平河町、日本都市センター	東海支部、香川支部発足

Dr. Janse's "Chiropractic can only grow as a profession" will be the JCA's new Policy. 4th President K. Takeyachi said.

In 1961 unity of the profession in Japan was achieved by a coalition of many chiropractic associations. In those days, such associations were nothing more than a leader, usually a teacher, and his followers. The coalition was run on the basis of balancing political power. In nine years the number of member associations increased from 8 to 15 and each paid the same nominal dues.

The coalition was a good system to start with, but as time went by it developed its own problems. The executive board had no power to act without the full agreement of the member associations. Also it did not have its own individual members nor any significant financial assets.

An important turning point for the JCA came in 1965, when on the advice of Yoneo Takeyachi, the board invited Dr. Joseph Janse, president of National College of Chiropractic to give a seminar. This was a historical success. In 1967 and 1969, the JCA invited Drs. Pennel and Heuser for international pain control seminars, and both of these turned out to be huge successes. This was the beginning of international awareness for the JCA.

In 1970, Yoneo Takeyachi's son. Kazuyoshi, who had just returned with a D.C. degree in the previous year, was elected as the 4th JCA president. Kazuyoshi Takeyachi was keen on chiropractic development in his country. He knew that for the growth of the profession a good system was as important as strong passion. He was strongly influenced by Dr. Janse's belief that chiropractic could only grow as a profession. He believed that a system had to be developed to insure that the profession was self-perpetuating.

Kazuyoshi Takeyachi proposed to change the structure of the JCA from a coalition to an organization based on individual membership. This proposal was accepted with much applause, but some chiropractors left out of fear that their own associations would lose their identities. The new 29 year-old leader took the bold step of appointing young officers. He also began publishing regular journals, broadening the scope of monthly lectures and organizing overseas chiropractic study tours. Within a year the JCA had 100 members and 10 times the budget that it had under the old system.

The new JCA had an effective management as well as a system for input from the individual members. This system of communication, as well as information from overseas, helped the officers to set the proper direction for the JCA. In 1970, the JCA celebrated the 75th anniversary of chiropractic and opened its first

business office to cope with the increased workload. In 1970 and 1971 Drs. Janse and Gillet were invited to talk about the scientific approach to chiropractic.By 1972 the membership had increased to 170 and local branches had been established to enhance regional activities. It should be pointed out that in those days there were only a few actual D.C.'s since most of the members came from other traditional healing arts.

During this period the JCA advanced more or less by trial and error. To establish chiropractic as a profession was by no means an easy to task. Many practitioners tended to regard chiropractic as a technique system rather than as a separate and distinctive healing art with its own unique philosophical implications.

As a consequence, some practitioners could not shed the concepts of their previous educations in, for example, bone setting, massage or shiatsu, where the emphasis was on pain releif rather than wholistic care.

Later in the 1970's, the JCA started a chiropractic certification program which was basically a self-directed learning course with standard chiropractic textbooks and uniform examinations. However, there were still many old-fashioned practitioners who thought that they had nothing to learn, so that even beginning this level of education was not easy. In fact only a few could understand the meaning of Dr. Janse's words, "Chiropractic can only grow as a professions."

Progess is always a struggle and this was only the beginning of a long journey for chiropractic in Japan.



月例研修会が主な活動

Monthly Technique Workshop was the Main Activity in 1970's



3月22日 第41回研修会 大越勝衛講師



4月12日 第42回研修会 竹谷内講師



第43回月例研修会 東京カイロ学院



7月9日

JCA (日本カイロ総連盟) は業者の学技向上を図る目的で、1968年より東京で月例研修会を開始。当時大勢いたベテラン先輩が交代で講師を担当した。当時の講師は白石嘉三、高橋正道、山田博士、西堀進午、松下茂、大越勝衛、藤川淳敏、新井康純、保坂岳史、竹谷内一愿、須藤清次氏など多士がいた。研修会の後は毎回、役員を中心に懇親会を開いた。

月例研修会は74年まで6年間77回続いたが、次第に講師も内容もマンネリ化し、問題点が多くなった。初心者には難しく、経験者には易しすぎる不満。かといって2クラスにするには講師と受講生が不足していた。これは執行部にとって簡単に解決出来ない問題であった。さらに、各地に支部が発足すると、東京だけでの月例研修会にも批判が高まった。また講義はテクニック中心に偏るため、学術的な解説の軽視に加え、研修会そのものも堂々めぐりで内容の向上に結びつかない悩みがあった。

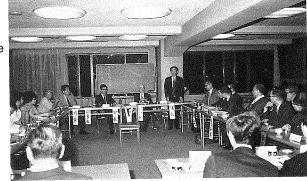
実際この問題は「今後のカイロ教育をどうするのか」という大きな問題 を含んでおり、教育の短期、長期ビジョンは明らかに急務であった。

短期的な対処では、1972年より、日本カイロセミナーを拡大し東京と名古屋で開催。73年、74年と引続いて幅広い講師を招聘、全国的なニーズに対処した。同時に執行部は長期ビジョンに取組んだが、人材(当時DCは竹谷内一愿、須藤清次の2名だった)、プログラム、テキスト作成など難間は山積していた。しかし1978年からカイロプラクター養成のための系統教育を開始する(40頁参照)。

系統教育と並行して、カイロプラクターに幅広い応用知識を育てるため外部講師を招いて、1980年から85年まで9回の教養講座を開いた。1986年からは系統教育卒業生が誕生したことから、カイロ開業のためのクリニカルと応用コースの2本立ての卒後教育を始める。

1972 理事会 Executive Board

Meeting





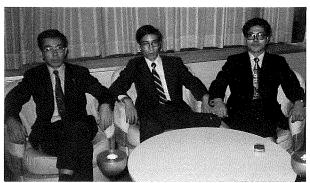
9月 理事会

197

1974年にリストラ断行 人事刷新で発展へ足がかり



Organization: The Second Step Restructure of JCA in 1974



人事刷新した新幹部、左より竹谷内会長、和田副会長、村松理事長 New Young Officers Lt to Rt: K.Takeyachi, President, K.Wada, Vice-President, T.Muramatsu, Executive Director

1970年に会長に就任した竹谷内一愿氏は、師弟関係の強い業界を改革して、職業人的意識作りとその連帯感からなる新しいカイロ業界作りに奔走し、JCAはかつてない活発な活動と健全財政を誇るまでに成長。しかし、古い発想と人事の硬直はさらなる発展に大きな障害として立ちはだかった。会長の改選期を迎え、藤川氏が立候補の動きを見せたが当日撤回したため、竹谷内氏は自らの再選条件として、大幅な人事一任を取り付けた。三選された竹谷内会長は、副会長に和田孝一氏、理事長に村松仲朗氏(会計兼務)を任命。両氏は東海支部の創設者で、最高幹部3名の平均年齢は30歳。日本カイロプラクティック総連盟はカイロ団体の中で最も若い幹部をもつ団体となった。人事刷新と斬新な発想の導入はいまでいうリストラで、JCAは2回目のリストラで将来の発展への足がかりをつかんだ。

事務所を設置(1970~)

Business office was established, 1970

1970年、JCAが会員制度を採用して以来、事務量は急増。当初の会長宅(東京青山)では処理しきれなくなり、1973年、世田谷区自由が丘に独立したJCA事務局を新設することになった。パートの事務局長に青野武郎が就任。1977年6月には再び会長宅に移転し、女子事務員・堀口八千子氏を雇用する。1984年4月より初のフルタイムの事務局長・高砂浩氏が就任。会員増加と共に事務処理量は激増し、JCAもOA機器の時代を迎える。1991年に港区浜松町の須見ビルへ移転。1993年高砂氏退職。事務局が手狭になったため新橋のSDビルに移転。同年懸案だった有限会社を設立し、女子職員2名(上平、甲藤)を雇用、会員福利に積極的に対応できるシステムを作る。またJCAセンターとして、教育・情報機能を備え、新時代に対応できる体制を作った。



1977年6月 JCA事務局青山へ移転、堀口八千子さんを雇用

2nd Restructuring of the JCA in 1974

The difficulty in restructuring lies in the fact that people may agree with one another on the basis of logic but still react differently emotionally. From 1970 to 1974, there was a new system along with new officers, which created a very active organization. However, the majority of members were still quite old-fashioned. They did not want any substantive changes and were not prepared to face real challenges. There needed to be a second restructuring of the JCA.

According to the JCA's rules, the members elected the president and he in turn chose the officers after his nomination. In 1974, there was no candidate for the presidency. Kazuyoshi Takeyachi decided to accept the candidacy on the condition that there would be a drastic change of officers. He was elected and chose Koichi Wada as vice president and Tsugio Muramatsu as executive director. They were lacking in experience, for the average age of the new officers was only 30 years old, but they knew what needed to be done and they were determined to do the job. The JCA's second courageous restructuring, as well as the change of officers to a new generation, set the stage for a promising future.



定時総会 JCA Convention (1974–1984)

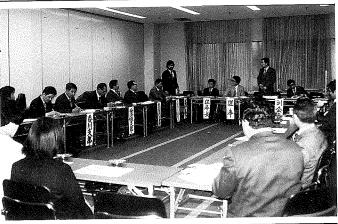
プロフェッションとしてのカイロプラクティックを日本に確 立するには、柔整やあマ指師、整体と一線を画するカイロプラ クティック業界を作る必要があった。会員制度を実施すること で、執行部の意向がより直接会員の末端に行き渡るメリットが 表われた。カイロプラクターによるカイロ業界作りという遠大 なプロジェクトが始まった。変革には会員の意識改革が必要に なる。総連は、JCAのマークが制定された1977年頃から新し い時代にあう「JCA」と呼称されるようになった。1979年に

はそれから長くJCAの基本政策となる「5つの基本方針」が 制定された。(1)カイロプラクターによる業界づくり (2)教育の 充実 (3)基準の確立 (4)研究の推進 (5)普及活動。

テクニックの切り売りでなく、和製カイロプラクター育成に 向かっての「カイロプラクター認定制度」。そのための系統教育。

JCAオリジナルのテキストや教室での教育方法。未経験の 不安を抱えながらも全員若さと情熱で新しいカイロ業界づくり に燃えた。







第18回定時総会 1979年3月25日

法制化の受け 皿作りとカイロ プラクターとい う実体を作ろう という主旨で認 定カイロプラク ター制度をスタ ート。初の32名 (既得権者) が 認定された。





第20回定時総会 1981年3月29日

カイロプラク ターづくり(通 信講座・中上級) が軌道にのって 迎えた20周年記 念の総会。支部 の全国拡大と支 部長会議の新設、 20周年史発行、 医科歯科大での 解剖実習実施。





第21回定時総会 1982年3月21日

竹谷内会長は 「今日求められ ているのは安全 と本物で、通信 講座のカイロプ ラクターづくり で国民の信頼に 応えたい」と会 員に喚起した。





第22回定時総会 1983年4月20日

ナショナル大 より藤井先生に 名誉法学博士号 が授与された。 教育委員会では 通信講座のテキ ストづくりを推 進。生涯教育の 単位制も決める。





第23回定時総会 1984年3月18日

会長任期を迎 え竹谷内一愿を を八選。総会記 念講演にはドイ ツ・キール大学 シュミット教授 による「関節の神 経生理学」が行 なわれた。通訳 は佐藤昭夫先生



定時総会 JCA Convention (98頁につづく)

□	会 期	会 長	会 場	備考
13	1974年 4 月14日	竹谷内一愿	東京・目黒区福祉センター	支部母体制へ、法制化の機運
14	1975年4月13日	竹谷内一愿	大阪・大阪チサンホテル	民主的運営、組織の充実
15	1976年 5 月23日	竹谷内一愿	東京・日本都市センター	名誉会長に藤井尚治先生、認定制度決める
16	1977年3月27日	竹谷内一愿	東京・日本都市センター	マーク採用、会旗制定
17	1978年4月9日	竹谷内一愿	東京・日本都市センター	全国通信講座スタート、カイロの定義
18	1979年3月25日	竹谷内一愿	東京・日本都市センター	5つの基本政策、32名初の認定者
19	1980年3月23日	竹谷内一愿	東京・日本都市センター	上級講座スタート
20	1981年3月29日	竹谷内一愿	東京・日本都市センター	創立20周年に佐藤昭夫先生の講演
21	1982年 3 月21日	竹谷内一愿	東京・日本都市センター	カイロプラクター休業補償制度発足
22	1983年 4 月20日	竹谷内一愿	東京・日本都市センター	藤井先生に名誉法学博士
23	1984年3月18日	竹谷内一愿	東京・日本都市センター	シュミット博士による記念講演